

2学期終業式講話

おはようございます。

2学期も本日で終了です。長かったと感じた人は悩み、考えた人で、短かったと感じた人は勉強にスポーツに忙しかった人かと思います。

そうした中で、友だちや家族に裏切られてつらい思いをした方にお話をしたいと思います。誰しもが信用していた人に裏切られるほどつらいものはありません。人を信用することが怖くなってしまい、その傷は大きいものです。

私も若い頃に生徒に裏切られて悔しい思いをしました。新人戦の第2シードだった選手が煙草を吸って約束を破り、このために試合には出さなかったのですが、また吸ってみたいなことを繰りかえして、こうしたことが度々あって、いつもかかかっていました。そんな時、年輩の先生から、「裏切られても許してあげるのが教員だよ」、「裏切られるうちが花だよ」と言われるんですが、なかなか納得がいかなかつたです。

それが少し変化したのは、卒業式の日に式が終わって教室に戻ってきた時に、一番裏切っていた生徒が花束を持ってきてくれました。その時には、まあ許してやるかみたいな心境になって、もういつまでもかかかっていても仕方ないなと思えたことです。

教員になって嬉しい時というのは卒業式で、この時にはなぜかなんでも許せてしまう心境になります。それから同窓会に呼ばれた時で、すっかり打ち解けた雰囲気になって、こういう時は教員という職業もまんざらではないかなと思います。

皆さんは、太宰治の書いた短編小説「走れメロス」を読んだことがありますか。太宰といえば「斜陽」や「人間失格」で有名で、戦後文壇で一世を風靡した作家ですが、この「走れメロス」は、明治時代以降海外から輸入された作品を太宰なりにデフォルメして書いたもので、私の中学生時代の国語の教科書に載っていました。内容は、メロスが信頼している友人とで捕虜になる交換をしますが、その間にお互いに一度だけ疑ってしまうというものです。

誰だって疑うことはありますが、それでも信じあうということにこの作品の狙いがあります。だからこそ友だちを信じるということが、いかに大切であり素晴らしいことかを知つていただきたい話です。

もう一つ、信じるということに本能的なものがあるということです。皆さんは高校に来て最初に口をきいた人を覚えていますか。最初に友達になった人を覚えていますか。これって相性といいますか本能的なものを感じさせます。海外へ行ってこの人は信用できるかどうかとも同じです。

私は今から40年近く前にそんな体験しました。当時25歳で、仲間の先生と台湾へ二泊三日の旅行をしました。現地のバスツアーに加わって、台湾のあちらこちらへ行きました。その時に小学校1年生の女の子がずっと私についてきました。手までつないできました。小学校1年生ですから7歳ですよね。その子から見れば25歳はお兄さんというよりおじさん

に見えたと思います。しかも外国人です。その女の子の両親は4歳の妹と一緒に、上の子は私に任せっぱなしでした。台湾ですから漢字で筆談をして、意思疎通をはかるわけですが、言葉はかわせなくともずっと私を信用しているんですね。国は違ってもこの人は大丈夫だと思ってくれてたんですね。この経験はその後アメリカでホームステイした時も一緒に、高校生と中学生の子どもがいましたが、ずっと私を信用していました。

2年生は先月海外研修で、見知らぬ国でタクシーに乗ってどうでしたか。怖さはなかったですか。そこには信用というものが存在したと思います。信じるということは、人種や国を問わないものかと思います。ある意味本能でかぎ分けるようなものがあります。1年生は来年の海外研修では是非味わってほしいと思います。

そして改めて、友だち関係、家族関係の中で色々あるでしょうが、信じるということを考えてほしいと思います。

明日から冬休みになります。健康に留意して、新年を迎えてください。

以上で校長講話とします。

(令和7年12月22日、終業式)